

<ラウンドテーブル報告1>

初年次教育における職員の役割について—職員主体と教職協働—第2報 —帝塚山大学「学習支援室」と金沢工業大学「ライティングセンター」—

【企画・司会者】 藤本元啓 (金沢工業大学)
【話題提供者】 中島 剛 (帝塚山大学)
垣内聡子 (金沢工業大学)

1. はじめに

藤本元啓

昨年度は玉川大学と金沢工業大学が、当該テーマに関する取り組みの具体例と成果を紹介し、参加者とともに悩みを含めた自由な討論を行った。終了後、参加者から継続の声が多くあったため、今回は帝塚山大学の「学習支援室」と金沢工業大学の「ライティングセンター」の概要、成功・失敗事例、課題等を話題として提供した。

これらをもとに、話題提供者への質問、参加者の所属機関の初年次学生に対する学習支援体制の実例紹介や課題等についての意見交換を行った。参加者42名。

2. 帝塚山大学「学習支援室」

(1) 学習支援室設置の経緯と体制

本学は1964年に開学し、文学部、経済学部、経営学部、法学部、心理学部及び現代生活学部の6学部9学科+大学院で構成され、約3,800人の学生が在籍する。

本学では、教職協働という面において、カリキュラム改革、補助金申請などを教員と職員が一緒に取り組んでいる事例がある。

学習支援室は2006年に学長のトップダウンで設置された(当時はリメディアル教育支援室)。学部(専門)教育理解のためには、日本語力(・英語力)の強化が必要という考えのもと、室長=副学長、教員(日本語)、職員、臨時雇員でスタートした(後に英語担当教員

も採用)。現在では、室長、教員2名(初年次教育、英語)、職員6名(専任・嘱託:兼務含)、臨時雇員2名という体制である。今回は学習支援室の取り組みを通して、教職協働の進み具合とその経緯を話題として提供した。

(2) 学習支援室の取り組み

当初取り組んだ内容は、大学での学習に向けた支援、定期試験対策、入学前教育及び相談業務であったが、進めていくにつれて次のことが明らかになった。

1) 成果

- ・正課科目(日本語運用能力をアップすることを目的とした科目)の設置により、学生の理解度がアップした。
- ・試験対策やノートの取り方などの指導により、学生の単位取得が促進された。

2) 課題

- ・学生の面倒は学部が主体で見えるものだが、「勉強がわからない」→「学習支援室へ行きなさい」という学内指導の流れができた。
- ・「勉強したい」という前向きな学生にとって来室しづらい場所となった。

(3) 学習支援室の悩み

設置して2~3年たつと次のような悩みが出てきた。

- 1) 部屋はあるが学生が思うように来てくれない(場所は新入生オリエンテーション等で告知済)。

- 2) 良い取り組みをしているのに来てくれない。
- 3) 他の部局等(学部も含む)との距離がある(物理的・心理的)。

当時、学内外にその解決策を求めたが、有効な打開策は見当たらなかった。

(4) 学習支援室における教職協働(転機と実践)

現学長が学習支援室の責任者となり、2(3)の悩みを共有し、支援室の目的を「リメディアル教育からの脱却を目指し、自学自習を促す組織となる」に変更した。教職員の間に意見の違いや今までの取り組みとのギャップに対立することもあったが、以下のような方向性が見えてきた。

- 1) 心機一転をはかるため、管理棟の色が強い場所から、学生が入りやすい位置へ移転し、来室しやすい仕組みも考える。
- 2) 学生が「やりたい」「やらなければならない」と思うプログラムを作る。そのため、他の部局にもヒアリングをし、「学生の将来につながる勉強」をテーマにする。
- 3) 他の部局に対して「待ち」ではなく、「こちらから伺う」姿勢を出し、学生と学部等のニーズに応える取り組みをする。

以上から、他の部局や学部を通して学生の

ニーズを聞きながら、学習支援室で実施可能なプログラムを提供し、学生が「利用したい」学習支援室を目指した。以下が具体的な取り組みである。

- 1) 年度当初のノートの取り方講座
- 2) SPI の講座や相談(図 1)
- 3) 数学・理科的要素を扱う学部授業の補完
- 4) TOEFL・TOEIC 勉強会
- 5) 教員採用試験に向けた勉強会

(5) もう一步進めるために

学部等のニーズに合った取り組みを進め、学生の利用が増えてくると、どのようなことを求めているのかが、少しずつわかるようになってきた。そこで、さらに利用者を増やすために、学生の気質(おとなしくて従順である)を考慮し、教員から「行ってはどうか」と勧めてもらう方法を考えた。従来から会議等では全学部均等に告知していたが、学部によって温度差があったため、パイロット的な学部にも協力してもらった。その実績を会議等で伝えるとともに、他の学部や部局等に説明して回った。

その結果「学習支援室」に対して「学生にとってプラスになることをしてもらえる部署」という認識が醸成され、徐々に学部等から学生に勧めてもらえるようになり、利用者数も少しずつ増えてきている。今後は、更に利用する学生を増やし、大学の使命の一つである学生の成長に寄与したい。

(6) 本学の取り組みからわかったこと

学習支援室での取り組みを通して次のことがわかった。

- 1) 教員・職員という立場はあるにしても、大切なのは学生の成長。その視点に立った企画を作り、集客方法が間違っていなければ、学生は利用してくれる。ただ、手を抜くと学生は離れる。
- 2) 学生にとって「やりたい」「やらなければならない」と感じるプログラムを提示する。

学習支援室講座
～SPI対策集中講座を実施します～

皆さんからのご要望にお応えて、以下の内容でSPIの集中講座を実施いたします。
SPIは大きく「能力検査」と「性格検査」の2つに分かれています。
その中でも、「能力検査」は、非言語問題と言語問題からなっています。
特に、理数系の思考を要する非言語問題について、今回は頻出度の高い問題を中心に勉強していきます。

●対象学生: 3年次生(全学部)

●日 時: 12月25日(水)・26日(木)・27日(金)

●時 間: ①9:00～10:30 ②10:40～12:10

●場 所: 1104教室

●講 師: 鎌田 先生(学習支援室)

●定 員: 40名程度(先着順)

●受講料: 無料

●申 込: 学習支援室(東生駒キャンパス図書館1階)
12月20日(金)17:00迄

【問い合わせ】 電話: 0742-49-8066
メール: skushushien@jimutezukayama-u.ac.jp

図 1 SPI 講座案内

- 3) 学部等から学生に勧めてもらえるような仕組みを作る。Win-Win の関係。
- 4) 学習支援室担当職員には組織が独立している分、広い知識(教務・厚生補導・キャリア等)と調整力が求められる。「ハブ」的な役割を果たせるかどうか成功のカギである。

学部、各部局まわりの際の注意点は次のようなものである。

- 1) 相手側が納得する理論武装(法的根拠、学生のデータなど)をする。
- 2) 学部・部局の意思決定方法まで考えて提案をする。

結論としては、昨年と同じになるが、教職協働を進めるには、(本学の規模であれば)学内の人間関係が重要であり、教員・職員がそれぞれに自分達の得意分野での役割を果たすことで、「学生の利益」につながるようになるのが大切である。

3. 金沢工業大学「ライティングセンター」

(1) ライティングセンターの歩み

本学は工学部、情報フロンティア学部、環境・建築学部、バイオ・化学部からなる理工系大学で、約7,400名が在籍している。

ライティングセンターは、本学学生の日本語文章作成能力の向上と、様々な文章作成に対応できる作文能力を身に付けさせることを目的として2003年に発足し、今年度で12年目を迎えた。科目課題の添削と個別相談窓口を二つの柱とし、科目課題の添削は学外の添削者に依頼している。発足当初は学内4名、学外6名のスタッフでスタートしたが、より多くの学生の文章を添削するべく学外添削者を増員してきた。

(2) ライティングセンターの体制

今年度は、①常駐のスタッフ1名、②事務担当スタッフ2名、③学外添削者23名で業務にあたっている。①は相談窓口での個別相談、学外添削者との連絡調整、課題の添削を

担当する。②は教員との連絡調整、学外添削者への連絡、事務手続き等を担当する。③は在宅で課題の添削を担当する。

(3) 初年次教育との関わり

本学初年次教育科目の一つに「修学基礎 A・B」がある。この授業では本学学生として、社会人の基礎としての行動規範を学ぶとともに、社会のあらゆる場面で必要な文章力についても学修する。授業担当の教員が文章作成の方法や手順、表現などを説明し、学生に1,000字程度の文章作成を課し、内容を評価する。一方ライティングセンターでは、この課題を添削し、改善のためのアドバイスをすることで、学生の文章力向上に向けて支援している。つまり教職協働作業である。

(4) ライティングセンターの業務内容

ライティングセンターの業務は大きく二つに分けられる。

1) 文章作成に関する相談機能と個別講座

ライブラリーセンター(図書館)内にライティングセンターを配置し、文章作成に関する相談で訪れる学生に直接アドバイスしている。また、今年度から希望者への個別講座「文章力トレーニング」を開講し、文章作成の基本が身に付けられるようにしている。1回につき40分、全7回で小論文、就職用作文の書き方が学べるように計画した。

2) 学外添削者による添削

前述した「修学基礎 A・B」を含め特定の授業と連携し、課題として学生が提出した小論文や作文等を添削している(図2)。今年度は、1年次の必修科目で2回、3年次の選択科目で2回、計4回の添削を実施する。学外添削者に依頼し、1年次では約1,750名の文章を一斉に添削している。

添削者は学生の原稿を添削するほか、アドバイスカード(図3)を付けて内容や構成などについて助言する。ライティングセンターは担当の教員と連携し、課題の文章の種類、目的、評価の観点等を事前に確認しておく。こ

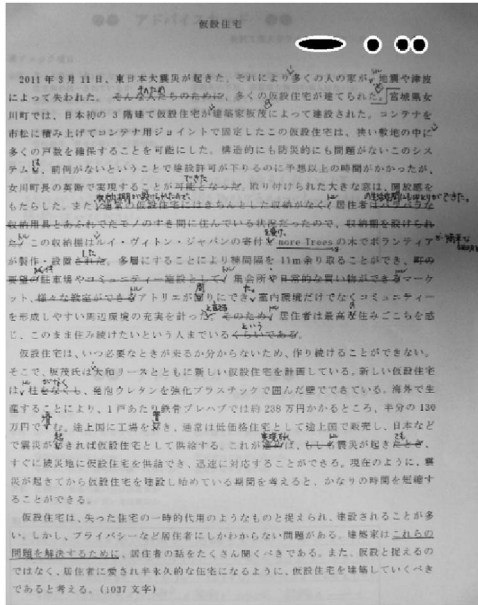


図2 課題の添削例

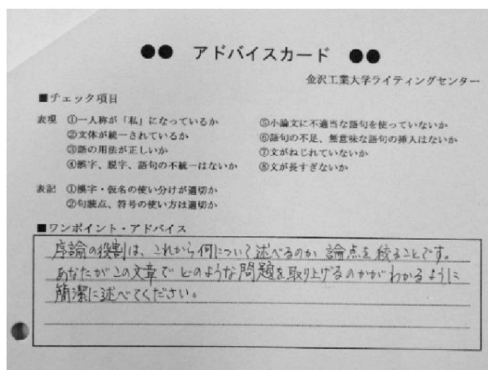


図3 アドバイスカード

れらを添削者に伝えること、アドバイスの例を提示すること、ライティングセンターに返却された原稿の確認をすることなどで、添削結果の統一を図っている。

3) その他

文章作成の方法をまとめた手引書『文章の書き方』を作成し、1年生と3年生全員に配布している。1年生に対しては、年度初めにこの手引書の内容を説明する特別講義を実施している。3年生には、進路セミナーの授業に出向き、履歴書やエントリーシート、自己アピール文などの書き方について、この手引書を基に説明している。

(5) 成果と今後の課題

ライティングセンターに直接相談に来る学生にはその場で文章の意図を確認し、よりよい表現や構成をアドバイスすることができることに加え、こちらの問いかけによって相談者が自ら考えを深め整理ができるなどの効果は認められる。

しかし、これでは学生の文章力を向上させるという本来の目標を達成できるとは言い難い。また、「持っていていけば直してもらえる」という安易な思いを学生に持たせてしまっているのではないかという懸念もある。学生が新たな文章を作成する際に、自らわかりやすい構成を考え、表現の工夫をして推敲し、それに向かえるような助言が必要である。思考の整理の際に有効な構成図の実践例や、文章の推敲の仕方の提示を工夫していきたい。

(4)の2)で述べた1年生を対象とした添削では、担当教員との更なる連携が望まれる。文章作成能力の向上を目指すためには、評価の観点を明確にしておくことは重要である。昨年はこれを意識したことで、教員の指導と添削者のアドバイスとの矛盾も少なくなった。今後は科目担当の窓口の教員はもちろんのこと、必要に応じて各クラス担当の教員とも連絡を取っていきたい。

また、2年生の必修科目に「アカデミックライティング」を配当しているが、さらに学年を追った継続かつ一貫したライティング教育の機会を持つことも学生の文章作成能力向上には必要であろう。

発足当初からの課題として、学外添削者の添削のレベルを統一することがある。添削すべき箇所を直してなかったりアドバイスが的外れであったりする場合、そのまま学生に返却できず再添削の必要が生じる。昨年度は、個別に何度も具体的に改善点を添削者に伝えることで、表記の誤りの改善はできた。しかし、表現や構成については更なる改善が必要である。今後は、細かい添削例を示す必要も

あると考えている。

4. おわりに

全体討論において、学生支援に対する教職員間の役割分担・温度差、正課科目との関わりなどについて共通課題が提示され、今後も

このセッションにおいて情報交換と議論を深め、学生のために一層の教職協働を推進することの必要性が改めて確認された。

次年度の大会では、開催校の明星大学から話題提供の確約をいただいている。多くの職員各位のご参集に期待したい。